

エッセイ

霊との対話

山本文子

初盆から霊現象始まる

とうとう米寿になった。教え八十八歳。誕生日が来れば満八十七歳である。予想以上に長くなった我が人生のなんと奇異に満ちていたことよ。語り残さねば、の思いで筆を執った。

思い起こせば二十九年前に夫が他界し、その初盆の日から私の身に奇妙な出来事が続いた。なぜ？ どうして？ の連続だったが、今は霧が晴れたようにその事由が分かっ

てきたつもりである。取りとめなく書いてみよう。

初盆の日のそれというのは、亡夫の遺影が目の前座卓の上に置かれていた葡萄の汁を吸い上げたことである。壁に掲げられた遺影の前方数十センチの位置の天井に、小指の先ぐらいの小さな黒っぽい染みが二、三十個丸く集団になつていてのを発見したのが事の始まりだった。座卓の上に椅子を積んでそこに乗り、指先で天井を触ってみると湿っている。何だろうか？ 次に気付いたのは遺影から下の襖にも点々と不揃いに床まで数個くつついている。更にな

んと遺影の口元や頬辺りにも数個、どろりとした水滴がくつついている。それを指先ですくい取り、嗅いでみた末娘奈美が「葡萄の匂いがするよ」と言うので、私も真似てそれを舐めてみた。確かに葡萄だった。これらの染みの数を数えてみると、一房の葡萄の粒の数に匹敵するようだ。

つまり一粒から一滴が飛び出したということだろうか。考へ巡らすと葡萄の置かれた場所を起点として、天井、遺影へと放物線状に染みが残っている。どうやら夫の遺影が葡萄の汁を吸い上げたらしい。まさか、と思ってもそれ以外に考えようがなかった。

「亡夫の霊が来たんだ。昔から言われている、初盆に先祖の霊が帰ってくるって本当だったのか」

私の心に衝撃が走った。人間死んだらおしまいと思っていたのは誤りだった。霊は存在するのだ。それを知らせてくれたのは夫ではない。霊になって存在している。夫はいなくなつたのではない。霊になって存在している。そして私たち二人を見守っていてくれるのだ。

そう思ったら私の心が一遍に軽くなるようになった。夫に見守られているとの思いに支えられることで私の人生は本当に楽しく幸せなものになった。生きている間は座布団のよ

うに私の言うがままになつてくれた夫。私は心の中で「ごめんなさい」と「ありがとう」を繰り返すようになった。

数々の霊現象の中で特に目立つたのはセットしていないタイマーを鳴らすことによつて夫が意思を示したこと、末娘と私の二人の手や顔を始め、身辺に金粉が頻繁に出現したことである。原稿の上やまな板の上にもよく散らばつた。特に土曜日が多かつた。なぜ金粉が出るのか。何のために出るのか知りたくて、私はあらゆる宗教家たちに訊いてみた。既成仏教は「超常現象については否定も肯定もありません」との答えだったが、新興宗教のほとんどは見事な

肯定ぶりで「金粉はよく出ますよ。霊界からのメッセージで良い知らせです。私たちも一生懸命金粉を集めるのですが、結局はやがて消えていきますよ。信者の皆さんには出る方が多いですよ」と言われた。ただ一つ、神道だけはまったく異なつていて「金粉の出現など科学的にありえない」と強く否定した。その否定が私に「神道はいかさま宗教だろるか」との疑念を抱かせて、神道についてより深く調べると、明治維新の結果生まれたのであった。その教祖は山口県の田布施という朝鮮人集落の老女だった。それまで神

道だけは教祖はいないと思ひ込んでいたら、最近になってようやく判明した。あの明治維新というテロを起こして天下を取った重要人物や、明治天皇となった大室寅之祐たちと同じに、神道の教祖である老婆までが田布施の住民だったとは。意味重大である。このことから明治維新の真相、日本の歴史の偽りについて一層に深く私は目覚めた。これはまさに金粉の力だったと言えよう。

セットしていないタイマーを鳴らすことで亡夫が意思表示をした、と前述したけれど、その一つに私の心に焼き付いて忘れられないことがある。こたつの中で末娘と向き合って座り、亡夫の噂のあれこれをしていて、ふと私が「このおしゃべりをきつとお父さんの霊がその辺に来て聞いているよ」と言った。その途端に「ピーピー」とタイマーが鳴ったのに本当にびっくりした。夫が「うん。俺はここに来ているよ」と答えたに違いない。霊現象でセットしていないタイマーが鳴る時は、決まって音が弱々しかったから区別がつく。この件については後々まで折に触れて末娘と私の語り草になった。その後も娘の進路とか二人の住まいに関しての迷いが生じる時はタイマーが鳴って答えを示してくれたたりした。やがてタイマーや金粉の現象が起

こらなくなったと思っていたら、次は別の形に変わった。私は植物大好き、動物大好きで縫いぐるみのあれこれが部屋に並べてある。心温かい友人からのプレゼントだけでなく、雨に濡れた歩道に転がって泣いていた(?)のを哀れさのあまり拾って持ち帰ったものもある。その縫いぐるみたちが異変を起し始めたのである。考えてみるにどうやら可愛がり、愛おしみ、大事にしているものには、昔の人が言ったように心が宿って、私を守る存在になってくれているらしい。

二〇一四年十一月、夫の月命日にほんの十五分ほど家を空けた後、帰宅したところ、固く施錠してあったにも拘わらず、玄関の下駄箱の上に異変が起こっていた。花瓶が後ろ向きになり、その横に立つ男児キューピーちゃんも後ろ向きになり、並び立っていた笹の女子キューピーちゃんも仰向きに倒れていたのである。これまで数多くの不思議現象を見てきた身には、また霊現象が起こったな、と感じ取れた。先祖霊や亡夫など、霊人たちが送ってくれたメッセージの意図するところはまっすぐ私に伝わってきた。「用心せよ。人が来ても軽々しく玄関を開けてはいけないよ」

と言っているに違いない。

その一年後に末娘が右翼からの脅しに遭い、私たちは急遽転居に踏み切った。下駄箱の上のこの異変があったからこそ、迷いなく転居する気になったのである。

異変を起こした花瓶は、歌会始に同時入選した縁で親しくなった女性からのプレゼントである。キューピーちゃんは春日井市の旧友からのプレゼントであり、男児キューピーちゃんには緑の服と、白に緑の入った帽子、女兒キューピーちゃんには赤の服とクリーム色の帽子を可愛らしく編んで着せ、贈ってくれたものである。彼女は私との電話中に相手の目前に金粉が始め、見ていた主人が「お前は金粉婦人だな」と驚いたそう。それがため一層友情が深まったのである。それぞれに友の温かい心がこもっているからこそ、霊現象も容易く起こったのであろう。

癌が消えた?

私にはもう一つどうしても伝えたい大きな体験がある。あれは七十三歳か四歳くらいの時だった。胆管炎を起こして入院したところ、家族を呼んだ主治医から肝内胆管癌の

宣告を受けた。だが手術の成功率の極めて低い箇所だと分かったので、私は医療に頼ることを諦めて退院した。そして自然治癒を目指して瞑想教室へ通い始めた。ここで思い出されてならなかったのは、家が近くて仲良しだった二人の幼友達、すみちゃんとよっちゃんのことであった。すみちゃんは六十代半ばに脳腫瘍で、よっちゃんは七十代初めにリンパ腫であっけなく他界してしまった。二人とも手術、化学療法など、可能な限りの治療を受けたにもかかわらず、悲しい結果だった。それを見てきた私としては、医療の限界を感じずにおれなかったのである。

瞑想教室の先生は「癌だって精神力で治せます」と心強いことを言ってくれた。それにする思いで毎日二回二十分ずつの瞑想を数か月ぐらい続けた。この時の私の心の支えになったのがもう一つある。それはスプーン曲げの体験だ。テレビで高塚光が実演しながら「曲がると思えば曲がるのです」と心の力を強調した。その言葉を信じて「じゃあ、曲がるんだ」と思った途端にスプーンが粘土のように柔らかいものに変化し、指先を軽く触れるだけでぐにやりと曲がった。これによって確かに人間の心には力があると私は悟った。だから癌も「必ず治る」と思えばその心の力

で治せる。これは確信だった。だが、その思いを抱き続けることができるかどうか、が問題だ。

結局、私は生き延びることができた。癌が消えたのか、それとも、誤診だったのかは分からないままである。以来、私は内科医とは無縁に過ぎてきた。当然ながら十年以上薬は飲んでいない。老化による関節痛で歩けない日はあつたけれども、今のところは元気である。

おしゃれには全く関心なくて衣類の流行にも無頓着、というごつい田舎者夫婦であつた。

以上、体験の一部をありのままに記述してみた。

(二〇一六年三月六日)

亡夫の人柄

霊現象を起こす霊人には、性格的な特徴があるだろうか。参考までに夫の人柄を説明しておこう。(株)大隈鉄工所の社員として生きた夫は真面目な働き者だったが、少し変わっていて出世欲はゼロ。部下を持つことは嫌がった。嘘ごまかしなく誠実で結婚生活三十年の間に妻の私を裏切ることは一度もなかった。私を評して「お前は人間が丸いな」と言っただけれど、そういう夫自身こそ丸い人だった。夫も私も共にシンプルな、すっきりした暮らしを好み、肩書き、地位などどうでもよい、生きることさえできればお金は余分にはいらぬ、大邸宅は手がかかるからいらぬ、